

人として女として、いかに生きるか。

佐々木彩子 — ライター

『愛と同じくらい孤独』

フランソワーズ・サガン 朝吹由起子 訳／新潮社／1976年



やれやれ。世間は若いお嬢さんの恋愛事情、さらにハッキリと言うなら性的な事情に、いつでも興味しんしんです。うんざりです。

自分自身がその喧噪から離れ、どさくさ紛れで子供も生んで、その子がそろそろ騒ぎに巻き込まれる年頃になろうかという今になってみれば、少しはわかるのです。

若い女性がどんな相手とどういう経緯で結ばれるか、どのように子供を生み育てていくかは、多くの人が無関心でいられない重大事。未来そのものです。だから大上段にかまえた結婚論から悪寒のするような下世話なゴシップまで、この騒ぎは人が生きていく限り、止むことはないのではないか、と。

でも自分がお嬢ちゃんだった頃、そんなことはわかりもしませんでした。「私のことでしょ？ 放つといて」としか思わなかった。自分が巨大な時の流れのなかの砂粒のひとつに過ぎないなんて、若い頃にはなかなか思いつかないものです。

前置きが長くなりました。フランソワーズ・サガンのインタビュー集『愛と同じくらい孤独』は、若くしてそんな世間の好奇心のド真ん中に突っ込んで、もみくちゃになりながらも壮絶に生き抜いた、ある美しい作家の20年の記録です。

サガンの『悲しみよ、こんにちは』という小説をご存知でしょうか。1954年に出版されたこの188ページの処女作で、18才の彼女のもとには、巨万の富とともに世間様の目と声とがとんでもない程に集まりました。

質問者 何歳のときに快楽を発見しましたか？

サガン どういう快楽ですか？

質問者 ばかげた質問、いわゆる《商業的な》質問でしたが、お上手な答え方でしたね。

実に失礼極まりないインタビュー、今なら完全にアウトですが、そんな時代だったのですね。「（あなたの処女作は）スキャンダルのところが受けた、という人もありました」という質問に対して、サガンは「複雑な恋愛関係を背景に、一人の女の子が男の子と肉体関係を結ぶごく簡単な物語ですが、その女の子は道徳上の悩みを持たないわけです」（そこがスキャンダラスととられたのでは？）と、あっさり振り返ります。

どの学校にもなじめなくて何度も放校処分を経験、大学入学資格試験をギリギリでクリアしたばかりの半落ちこぼれお嬢さんが、あれよあれよという間にスターダムに。仲

間との、どんちゃん騒ぎ。自動車事故。

あまりにもチャーミングで激しくて、若い頃はわくわくしながら読んだものですが、今改めて読み返してみると、そんなものは、この本の前段に過ぎませんでした。

作家サガンは一貫して真摯に率直に、自分の人生と仕事を語っています。

人として女として、いかに生きるか。どう仕事をしてゆくか。 